おっちゃんのお米の学校

①

脚本　ますふじ圭
画　おおくぼヒロアキ

楽しい紙芝居を演じるために

紙芝居は、読み手がいれば誰でもどこでもできます。舞台や舞台を置く台があれば安定した紙芝居を行えますが、ないからといって必ずしもできないものではありません。

演じる人自身が、紙芝居から外へ広がる世界を感じてください。聞き手に「伝える」気持ちを大切にして始めましょう。

①まずは声に出して下読みをします。そして、物語の情景や内容を確認します。なんども声に出して読んでみることが大切です。使用する紙芝居が自分のものであれば、鉛筆で書き込みをしていくと、自分の弱点を意識して練習できるでしょう。

②句読点にかかわらず、物語の展開によって間の取り方を工夫します。また、紙芝居の内容によっては、少しだけ聞き手に考える時間、想像をする時間をあたえることも必要です。これも、鉛筆でしるしをつけておくと演じやすくなります。

③次の場面にいくときは、物語の展開によって紙芝居を抜くスピードを変えます。そうすることで変化のある楽しいものになります。たとえば、ゆっくり抜いたり、少しずつ止めながら抜いたり、一気に抜いたりと物語の展開にあわせて工夫してみましょう。

④次の場面にいくときには、あわてずにしっかりと収めてから（舞台のない場合には重ねてから）落ちついて読み進めます。

⑤登場人物が複数でも、無理に声色を変える必要はありません。お話やメッセージを「伝える」ための声ですから、聞き手に届くものであれば十分です。

⑥練習や紙芝居を行った後には、次に使うときのために必ず順番をそろえておきましょう。また、演じる前にも必ず順番を確認してください。順番が違っては、演じ手も聞き手もとまどい楽しい紙芝居にはなりません。

⑦紙芝居当日は、聞き手が床に座っている場合や椅子に座っている場合などに応じて、演じ手の立ち位置を考えて、見やすい配慮が必要です。

編集協力　臼井 隆

おっちゃんのお米の学校

平成20年3月3日　初版発行

脚本　ますふじ圭
画　おおくぼヒロアキ
発行者　柳楽節雄
発行所　社団法人家の光協会
〒162-8448　新宿区市谷船河原町11
電話　03-3266-9038

制作　株式会社家の光出版総合サービス
〒162-0826　新宿区市谷船河原町11
電話　03-5261-2302
印刷所　小宮山印刷株式会社

②

四月のある朝、先生と一緒に、おじさんが五年生の教室に入ってきました。

先生「みなさん。

毎年、五年生に、田んぼでお米の作り方を教えてくれている、稲作農家の先生を紹介しましょう」

おっちゃん「みなさん、こんにちは！

これからみなさんは、イネのお父さんやお母さんになったつもりで、おっちゃんと一緒に、田んぼでイネを育ててください」

ユカ「えーーっ、自分のことおっちゃんだって」

くすくす笑うユカちゃんの隣でアキラ君は、

アキラ「なんでーお米作りなんて…　いやだなあ。

スーパーに行けば何でも売っているのに。

どうして学校で、食べ物を作らなくちゃいけないの」

（ゆっくりと、ぬきながら）

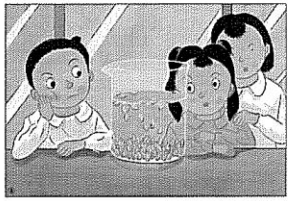
生徒一人一人を見ながら話している

笑いと驚きを込めて

いかにもいやそうにつぶやく

この物語の主な登場人物は、おっちゃん、アキラ、ユカです。この場面で三人が登場します。

この物語は、お米の一生を説明しています。多くはおっちゃんが説明します。説明の場面がたくさんです。説明調にならないように注意してください。紙芝居を見ている子どもに語りかけるように話してください。

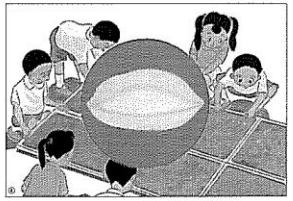


③

「ビーカーの中にあるのが、モミだよ。
こうやって塩水に沈んだものだけを選ぶんだ。
これは塩水選といってね、元気な種モミを選ぶ方法なんだ」
おっちゃんは一粒の種モミを手の平に乗せて、
「種もみは水につけます。十分に水を吸って芽が出てきます」

（さっと、ぬきながら）

ビーカーを指しながら



④

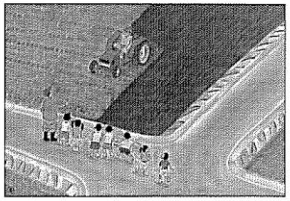
「ほら、種モミを見てごらん。ちょっぴり芽が出ているだろう。
これを、土の入った苗箱にまきます。
重ならないように、一センチくらいの間隔をとってね。
まき終わったら、上から土をかけるんだよ。
ほら、いいかげんにやらないの！
一粒、一粒、ていねいに」
みんなは熱心にまいていますが、アキラ君は
「ああ、めんどくさい。ああ、アホくさい」
「いいかい、みんなは今、命の種をまいているんだよ。
だから、ていねいに、大切に、やって欲しいんだ。
農家の人は苗を育てることに、とても気を使っているんだよ」

（ぬきとりながら）

芽を指しながら

なげやりに

アキラを意識しながら愛情のこもった表現



⑤

「ここが、みんなのイネを育てる田んぼだよ。
もうすぐ田植え。
水を田んぼに入れる前に、とても大事な仕事を、ちょうどお隣の田んぼでしているから見にいこう
これは、田起こしといってね、田んぼの土を掘り起こしているんだよ」

「先生、どうして、土を掘り起こすのですか？」
「先生はやめてよ。おっちゃんでいいよ」
「じゃあ、おっちゃん！　教えて！」
「ほら、雑草や去年のイネの株も、みんな土の中に混ざっていくだろう？　あれも、みーんな栄養になるんだ。
さて、みんなは来週、代かきという作業をします。
水を入れた田んぼに入るよ。
汚れても良いかっこうをしてくるようにねー」
「えーーー！」
田んぼに、入るのー！」

（ゆっくり、ぬく）
みんなは、何だかとても楽しそう。
でも、ひとりだけ、しかめっ面の子どもがいました。

いかにも照れているふうに

驚いて大きな声で

⑥

「それでは、代かきを始めまーす。
足で、土をくちゃくちゃにしてくださいね」
「うわー」「ぬるぬるだあ」「きゃあ」
「ねえ、おいでよ、アキラ君。
ぬるぬるしていて、おもしろいよ」
それでもアキラ君は、靴をぬいだだけ。
もう、みんなは田んぼで大騒ぎです。
おかげで、土がどろどろになりました。
「はーい、やめてーー。
今、みんなは、水の中で土をくだいて泥にしたんだ。肥料も、いっしょに、かき混ぜている。これが代かきだ。
こうしてから、苗を植えるんだよ。
イネにとって、田植えは入学式。苗を育ててきた苗箱から、いよいよ、お米の学校に入ってくる」

（ゆっくり、ぬく）
でも、アキラ君だけは、そっぽを向いていました。

いかにも騒がしそうに、いくつかの声で
優しくでも元気に誘う

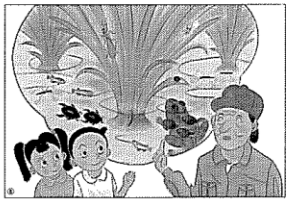
⑦

「いよいよ、今日は田植えでーす。
イネは、一か所に二本か三本の苗を、いっしょに植えます。
多すぎてもダメ。
それから、土の中に三センチくらいの深さに植えてください。
浅いと倒れちゃうし、深すぎても、成長が悪くなるからダメなんだよ。
先生たちが、田んぼの端から端に、ひもを引っぱっているね。
ひもには、三十センチの間隔で、赤い印が付いています。
そこに植えてください。
植えたら、一歩か二歩、後ろに移動して。ひもも、いっしょに移動するから、また、同じように植えてね。
それでは、始めまーす」
みんなは、はだしになって、次々に田んぼに入っていきました。
真剣な顔です。でも、アキラ君は、あぜ道にしゃがんでいました。
「長ぐつを貸してあげるから、植えてごらんよ」
アキラ君は、しぶしぶ田んぼの隅に入りました。
でも、植えた苗の数は、バラバラ。
ときどき、ずぼーと深く植えたりもして…。

（ぬきとりながら）
こんなアキラ君のイネは、うまく育つのかしら？

イネは～ダメなんだよまでは
ゆっくりていねいに。印象に
残るように

優しく諭すように



⑧

田植えから一か月が経ちました。

「みんなのイネ、ずいぶん大きくなったね。

何か、気づいたことがないかな？」

生徒達「葉っぱが増えているみたい」「あんなに、苗を植えたっけ？」

おっちゃん「そうだね。今では、何だか葉っぱや茎が増えているね。これは、むずかしい言葉だけれど、『分げつ』っていうんだ。イネが自分でお友だちを作って、たくさんのお米を作ろうとしているんだよ」

生徒達「へええ」

みんなの目が丸くなりました。

おっちゃん「それから、田んぼを見て何か気づいたことがないかな？」

生徒達「おたまじゃくしが、いる！」「ゲンゴロウが泳いでいるよ」

おっちゃん「田んぼの水は栄養分が豊かなんだ。イネの葉を食べる害虫※やゲンゴロウみたいな、害虫を食べてくれる益虫※もたくさん集まってくる。農薬を使えば、害虫は退治できる。でも、益虫もいなくなってしまうんだ。だから、益虫の力を借りながら、できるだけ少ない農薬でお米を作ろうと、農家の人は努力をしているんだよ」

「へええ」

アキラ君の目も、いつの間にか、輝き始めていました。

（ゆっくり、ぬく）

イネは、どんどん大きくなりました。

そして、ひと月が経ち、梅雨の季節を迎えました。

口々に話すように

絵を指しながら

驚いたように

口々に話すように

※害虫＝害を与える虫

※益虫＝役に立つ虫

⑨

「あれ、田んぼの隅っこのイネは、株がふえすぎだね。これでは、混みすぎて大きな米粒は実らないよ。
逆にこっちは、分げつが進まないで、ひょろひょろと、のびている。
イネはね、これからが、また大事な時期。
今日は、みんなにイネの健康診断をしてもらいます。
この紙に、イネの身長、分げつの数、根っこの強さ、葉っぱの色や太さを書いて報告してください。
それを見て、おっちゃんが、どんな肥料をやるかを決めます。
では、始めてください」
「おっちゃん、さっきのイネ…、ぼくが植えたのだよね。
もう、あのイネたちはダメなの」
「いいかい、アキラ君。
生き物は、最後まで、決して生きることをあきらめない。
だいじょうぶ、このイネもがんばってお米を実らせるよ。
そのために、ちゃんと健康診断をするんだ。
さあ、がんばって」
アキラ君は、大きくうなずくと、田んぼに入りました。

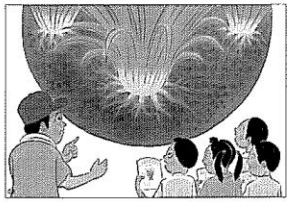
（ゆっくり、ぬく）
それから数日後…。

ひょろひょろ苗を指しながら

せりふ以外に「分げつって分かるね」「根っこの強さ」はどうすれば分かるのかなと問い掛ける

心配そうに

励ますように

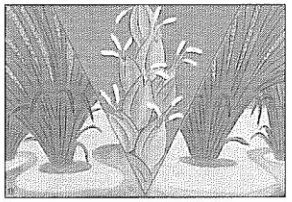


⑩

生徒達「えーっ！」
生徒達「田んぼに水がない！」
おっちゃん「ははは、おっちゃんが、水を抜きました。
これはね、『中干し』というんだよ。
水を抜くとね、土の中にたまったガスが外に出て、土に新鮮な空気が入る。
イネは水を欲しがって、必死に根を張ろうとする。
そこをねらって、また水を入れるんだ。そんな水の出し入れを一週間かけて何回かやるんだよ。
すると、根がしっかり横に広がって、
これから育つ稲穂を支えられるようになるんだ。
これまでイネは水に守られてきた。
でも、これからはしっかりと根を張って、
大人になる準備をするんだ」
アキラ君は、真剣におっちゃんの話を聞き、しっかりノートにメモしています。

（さっと、ぬきながら）
そして、夏休みもまん中のころ…。

驚き
一拍おいて
ははははまでが笑いながら。
あとはていねいに



⑪

「よく見てごらん。これがイネの花だよ。白い花がたくさん出ているだろ。

これが、おしべ。

めしべは、おしべが出ている『えい』の中にある。

この『えい』が、お米を包む『モミ』になる。

モミは、ほら、春に種モミで見たよね」

アキラ君は、見つけました。自分が植えた、田んぼの端っこのイネにも、ちゃんと花がついていることを。

「雨ばかりで気温も低い日が続いただろ。花が咲くかどうか、おっちゃん、とても心配だったんだ。

でもね、みんなが愛情をこめてイネを育ててくれたから、こんなにたくさんかわいい花が咲いたんだよ」

アキラ君は、自分が植えたイネをなでながら、何度も、

「がんばったね！　がんばったね！」

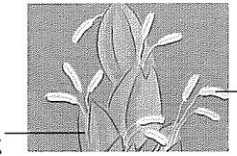
「花が終われば、すぐにお米が育ち始めます。

まだ、やわらかいお米を、スズメがねらっているから、だからみんなで案山子を作ろう」

（ゆっくりとぬきながら）

しかし、夏休みの終わり、大変なことが…。

絵を指しながら



うれしさと、感謝を込めて

一拍おいて

⑫

大きな台風が、やってきました。

ビュー、ビュー、ザーー、ザーー
ビュー、ビュー、ザンザカ、ザーー

垂れ下がるほどに育ったイネの穂は、大きく揺れて、今にも、水かさが増えた田んぼに倒れてしまいそうです。

おっちゃんは、田んぼが心配で、見回りにやってきました。でも、何もできません。じっとがまんして、台風が通り過ぎるのを待つしかないのです。

「田んぼの神様、お守りください。
子ども(おっちゃん)たちのために…」

田んぼに向かって、手を合わせた、その時、

「あっ！　アキラ君」

おっちゃんは、思わず、息をのみました。

アキラ君の横では、水路の水がドウドウと流れていました。

（さっと、ぬきながら）

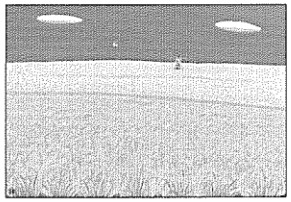
「危ない(おっちゃん)ぞ！　アキラ君！」

一一場面、一二場面は感情表現豊かなページです。何回か読み込んで自然にせりふが出るようにしてください

⑬

「アキラ君、台風のときは、大人だって危ないんだぞ。
田んぼの周りのあぜが崩れて、水路に落ちて死んでしまうかもしれないんだ」
「おっちゃん…」
「さあ、早く、うちに帰れ。ずぶぬれで、かぜをひいちまうぞ」
「でも、イネが…。こんなに倒れちゃって…。
せっかく実った穂が、水につかると腐ったりするんだよね。
穂は、ダメになっちゃうの？」
「…いや…、ここまで育ったイネが、そんなに弱いはずがない」
アキラ君は、じっと、おっちゃんの目を見つめました。
そして、大きくうなずきました。
「うん、わかった」
アキラ君は家に帰り始めましたが、途中で立ち止まり、ふり返りました。
「おっちゃーん！
おっちゃんも、気をつけてね」
冷たい雨にまじって、おっちゃんの頬に、温かいものが流れました。

（ゆっくり、ぬきながら）
そして、秋になり、田んぼは、こーーんなに…。



⑭

おっちゃん「こーんなにみんなの田んぼが、金色になりました。
たーくさん、お米ができた証拠だね。
さーて、春から、どんなことがあったかな？」
生徒達「種モミを蒔いたー」
「トラクターの田起こし」
「泥んこの代かき！」
「田植え」
「分げつ！　それに、ゲンゴロウ！」
「イネの健康診断！」
おっちゃんは、ここで田んぼを指差して、
おっちゃん「健康診断の時に、一番隅っこにあったイネはどうなったかな？
太りすぎのも、やせすぎのも、ほらみんな、
それなりに、お米を実らせているよ」
おっちゃんは、アキラ君にほほえんでから、
おっちゃん「そのあと、どんなことがあったかな？」
生徒達「中干し！田んぼの水をぬいた」
「イネの花を見た！」
アキラ「台風がやってきて、田んぼが沈みそうになった」
おっちゃん「そうだ、いろんなことがあったね。
イネは、子孫を残そうと、がんばって生き抜いたんだ。
人間は、そのがんばりを助けるだけなんだよ」

（ゆっくり、ぬきながら）
さあ、そして、いよいよ、秋も本番です。

口々に

口々に

格調高く

⑮

「これから、イネ刈りをします。
お手本を見せるから、よく見て、やろうね」
おっちゃんは、鎌の刃をイネの根元に当て、一気に手前に引きました。
鎌を持って田んぼに入ろうとするみんなに、
「もっと、はなれて、はなれて！
いいかい、鎌は刃物！
危ないから、ぜったいにふり回しちゃ、ダメ！」
みんなは交代で田んぼに入り、イネ刈りを始めました。
「どうした？　アキラ君」
「おっちゃん、ぼく…。
何だか、育ててきたイネを刈るの…、イヤな気がする…」
「そうか…、でもな、
生き物は、みんな、別の生き物の命をいただいて生きている。
このイネは、人間の大切な食べ物として、育てられてきたんだ。
だから、お米は、一粒もムダにできないよね。
さあ、『いただきます』って、心の中で言いながら、
このイネを刈ってあげようよ」
しばらくして、アキラ君は、うなずきました。そして、イネの根っこに、鎌をやさしく当てました。

（ゆっくり、ぬきながら）
刈られたイネは、日に干され、脱穀されて、一粒一粒のモミになり、モミすりされて、精米されて…。

やさしく問い掛ける
感迫った感じで

⑯

生徒達「おいしいー！」

「ほんと。もう、最高！」

みんなは、おにぎりをほおばっています。みんなで収穫した、あのお米のおにぎりです。

アキラ「あのね、おっちゃん」

おっちゃん「なんだい、アキラ君」

アキラ「ぼく、来年もお米作りをしたい。今度は始めから、きちんと、やりとげてみたい」

すると、ユカちゃんがアキラ君のまねをして

ユカ「『ああ、めんどくさい、アホくさい、いやだよ、泥んこなんて、大きらい！』

こーんなこと言っていた人が、来年も作りたい？

ほんとに、アキラ君、できるの？」

アキラ「できるよ。ちゃんと真剣にやる。

だから、おっちゃん！

お米づくりを、もう一度、教えてください」

おっちゃん「わかった。来年は、おっちゃんの特別授業だ。

苗作りから、もう一度やってみよう」

ユカ「わー、ずるい、ずるい。

ユカにも教えてー」

ユカちゃんは、ニコっと笑って、アキラ君にうなずきました。

みんなの笑い声が、渡り鳥たちの飛ぶ空に流れていきました。

おしまい

口々に、うれしそうに

語りかけるように

真剣に

はやしたてるように

きっぱりと